

大川周明の日本歴史観

昆野 伸幸

はじめに

大川周明（明治一九（一八八六）～昭和三一（一九五七）年）は、近代日本において北一輝に並ぶ超国家主義者、また代表的なアジア主義者として著名な人物である。

大川は、大正二（一九一三）年の書簡において「私の日本史研究は他日私が精神界の一戦士として起たん為、起ちて良き戦を戦はんための至当なる且必要なる準備と存じ居り候^①」と述べているように、その思想形成を始めた大正初期から、日本史研究の必要性を痛感していた。特に第一次世界大戦後は、貫して日本歴史を自らの研究対象とし、

自分なりの日本歴史像を提示することを課題としてきた。にもかかわらず、従来の研究においては、大川の歴史観が研究の対象とされることにはほとんどなかつた。歴史観を取り上げた数少ない研究にしても、使われる資料はほぼ『日本二千六百年史』のみに限定されていたし、また多くは他の歴史家との比較研究を主とした部分的な引用に止まつており、大川の日本歴史観の全体像や特質についての検討は十分になされてきたとはいひ難い^②。実際には大川は、大正三（一九一四）年頃、『列聖伝』という歴代天皇の伝記の編纂を完成している。この書は刊行されなかつたものの、これを嚆矢にして、大正一〇（一九二二）年に初めて日本歴史の通史たる『日本文明史』を刊行して以来、昭和四（一

九二九）年に『国史概論』、昭和六（一九三一）年に『国史読本』、昭和一四（一九三九）年に『日本二千六百年史』といつた三冊の日本歴史書を刊行している。そして、それらのほとんどは刊行数年後に改訂版が出されて版を重ねており、当時の国民に広く読まれていたことを物語っている。

大川は、マルクス主義が流行し、反国家、「伝統」無視の風潮が盛んになつた昭和初期の現状に対して、その原因を次のようにとらえ、危機意識を露にしていた。

当時「明治期——引用者註、以下同」の吾国には、パーレー

の万国史、又は十八史略に比すべき日本史がなかつた。

（中略）パーレーの万国史は小説を読む興味を以て之を読みさせる魅力を有し、十八史略に至つては少年をして血湧き肉踊らしめるに足るものがあります。然るに私は日本史に斯様な著作を探りえなかつた。（中略）この国民全般の好読物たるべき日本史なかりしことも多くの青年をして日本其者に無関心たらしめた一因と存じます^③。

大川が執拗に日本史の著作を刊行し続けた背景には、自ら

「国民全般の好読物たるべき日本史」を提示することで、

国民の「日本」への関心を喚起する使命感があつた。大川

は、過去の「日本人」の偉業を想起させ、読者にその物語への参画を要請したのである。

福沢諭吉は明治八（一八七五）年に「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」、「日本國の歴史はなくして、日本政府の歴史あるのみ」（『文明論之概略』）と、日本における「国民の歴史」の欠如を問題にし、その創出を切迫した課題として意識していた。このような「国民の歴史」の創出という明治以来の、近代国民国家形成期の共通の課題に対して、大川はいかなる歴史観を形成することによってその解答としたのであろうか。

大川の一連の日本歴史書は、序と、現代を記した結論部以外は、若干の章構成の増減はあるものの、内容的には一貫性を保つていて。そして、現代を扱つた結論部の記述が時期によつて異なることは、大川が関心を向ける現実問題が変化していることを意味している。このことから本稿では、大川の時事的課題と関わらせながら、彼の日本歴史觀について、三つの特質を抽出してみたい。その三つの特質の兼備こそが、大川の日本歴史觀が、ファシズム期において、唯一「正史」としての資格を具えたものであつたことを示すことになるであろう。

一、理解の前提——「伝統にしばられた時代」

一次大戦を契機とする「西洋の没落」は、近代の歴史觀

の主流であつた進歩史觀をも破綻させた。このような西洋の危機的状況を受けて、アジアでは西洋が政治的、経済的に相対化され始めた。のみならず、自國、自民族の中に良き「伝統」を見出だし、その「伝統」に回帰していく現象が顕著に見られた。復古⁽¹⁾「伝統」回帰が時代の潮流となる。例えば中国では、一次大戦前には典型的な西洋文明論者と目されていた杜亞泉（筆名は僑父）が、西洋文明への不信と自らの中国文明への信頼、そしてその「固有の文明」による西洋文明の危機の救済を表明している。⁽²⁾

日本でも、一次大戦後は、このようなアジアでの思潮の変化を背景として、政治思想の多様化と共に歴史觀⁽³⁾「伝統」もますます多様化していった。その多様化の下、「伝統」こそが自らの思想の正統性を最も保障する時期に、あらゆる政治勢力は共通して「伝統」論を展開していた。それら諸「伝統」の対立は、自らの思想の正統性をめぐるヘゴモニー競合を意味していた。近代日本においてあらゆる政治勢力が「伝統」の存在を無視できなくなる事態を、長谷川如是閑は次のように適切に見抜いている。

古典の研究の如きは、（中略）現実に時代の歴史に動機することなしには決して起り得なかつた。奈良時代における古典編纂の事業、封建末期の江戸時代における古学、明治の国民主義勃興時代における『国語学』の

勃興等、いづれもその時代の国家的又は反国家的運動のものに外ならなかつた。古典はその度毎に再生産され、過去の残骸から新しい生命が創り出された。近來我国における動、反動の両翼に古典研究が盛んになつて居るのも、その意味から興味ある現象である。⁽⁴⁾

古典、「伝統」への論及は「動、反動の両翼」という政治勢力の間だけにみられる現象ではなかつた。一次大戦後には、体制側から内務省神社局編『国体論史』（大正二〇）が刊行された。それに対し、「国体論史」とは異なる「伝統」を志向する国民の心性の一部は、いわゆる超古代史を描いた「古史古伝」と総称される偽史の流行として現出した。また「皇室中心の歴史」たる六国史には欠如した、「国民側の史実」発掘の動きが起つて同じく一次大戦後の時期である。「伝統」をめぐる問題は、まさに全國民的なものであった。

さらに「国体の精華」を誇る「国体論史」＝万世一系の天皇制の「伝統」に対し、吉野作造や渡部義通といった民本主義者やマルクス主義者は果敢に挑戦し、それを逆に自らの主張の正当性を保障する根拠として読み替えていた。このような読み替えは、「国体論史」とは異なる「伝統」を志向する国民の存在を背景として初めて成り立つものであつた。しかし、非体制的な色合いをもつこののような主張

や運動も、「伝統」という共通の土俵に上がることによって、かえつて結果的には国民国家「日本」の形成を助け、それを支えてしまう機能を果たしていた。

つまり近代日本は、「伝統」に強固に支えられた天皇制や「国体」そのものを根底から転覆させる、即ち「伝統」に依拠しないばかりでなく、「伝統」そのものを破壊しようとする革命論の成立する余地のない時代¹⁾「伝統にしばられた時代」であった。このような時代にあつては、上は天皇から下は民衆まで、彼等の思惟様式は決定的に「伝統」にしばられていた。当時の体制や様々な国民運動にしても、そのあり方の方向性を決定づけるのは、「伝統」に逆らえず、むしろ積極的な同調すら志向したそれぞれの思惟様式であろう。まさにこの「伝統」の問題を解明せずして、近代日本のファシズムの意味は正確に理解できない。伊藤隆氏の「革新」派論や、山之内靖氏らの「総力戦体制」論などの影響によつて、近年日本ファシズムの研究は行き詰まりを見せている。このような事態は、当時の人々を規定した思惟式を明確に分析しないまま、体制、運動、思想と個別的に研究が進み、結果、総体としての日本ファシズムの思想が研究されてこなかつた点に由来するだろう。

それでは、「思想としてのファシズム」を「伝統」という視角からとらえ直そとすればどうなるであろうか。從来

「体制としてのファシズム」の根本的なメルクマールとして、國民の強制的画一化が挙げられてきた。これを思想史の見地からいえば、そのメルクマールは國民に共有される過去の記憶、即ち「伝統」の画一化による「正史」の創造、確立ということになろう。先述の様々な「伝統」の、自らの正統性をめぐるヘゲモニー競合の事態を仮に「伝統の下剋上」と呼べば、このような「下剋上」の時代を生き残り得る歴史觀こそが「正史」である。それでは、ファシズム期における「正史」の要件²⁾「下剋上」の時代を生き残り得る要件とは一体何であつたろうか。ファシズムは、内においては総力戦体制構築のために強烈な國民統合と体制内変革を目指し、外に対しては既成の國際秩序を否定して侵略戦争を遂行し、世界再分割をはかる思想や運動である。そこでは、まず何よりも第一に、〈日本的なもの〉の価値を信じ、それが一貫不斷であるという徹底した「自國史」であることである（I）。だがこれだけでは、明治以来の近代國民国家化を推進する日本においては極めて一般的な要件に止まる。ファシズム期、総力戦体制構築のための民衆動員においては、民衆の「自發性」をも喚起する必要があつた。そのため「正史」は民衆の支持、共感を不可欠の要件とした。この点から第二に、不況の下で鬱屈した民衆の現状否定の不満を吸い上げ得るものとして、日本的革新

を志向していることである（Ⅱ）。さらに総力戦は対外思想戦の一面も持つ以上、たとえ建て前とはいえ擬似的な普遍性を装わねばならなかつた。第三には、西洋中心の世界秩序否定＝アジア解放という日本の「世界史的使命」において、日本の盟主性を正当化しつつ、西洋帝国主義に呻吟するアジアからの期待を吸い上げ得るものであることである（Ⅲ）。民衆・アジアというフィルターを通して、諸「伝統」は「正史」へと瀘過されていった。そして、Ⅰという「日本的なもの」の特殊性を基盤に、国内的にはⅡ、対外的にはⅢを全て満たす歴史觀こそが「ファシズム期に要請される唯一の正統な「伝統」」＝「正史」であった。また、この「正史」が確立されるまでの諸「伝統」の統合、排斥の動きが「思想としてのファシズム」の形成過程であるとみなせよう。

ところで、従来戦前・戦中の歴史学を支配した歴史觀はしばしば「皇国史觀」と表現されてきた。この「皇国史觀」という用語は、歴史的には、昭和一八年頃から体制側に位置する文部省の人々によって使われ始めたものである。こ

のことは、「皇国史觀」という史觀が『革命論』（文部省思想局編、平泉澄著、昭和九）、「國体の本義」（昭和一二）、「臣民の道」（昭和一六）、『国史概説』（昭和一八）といつた文部省の一連の国民教化策（＝体制にとって都合の良い「伝統」の強制）

の流れを自らが対象化して表現した史觀であつたことを意味している。

山田孝雄は国体の本義解説叢書の一冊において、「われ（）日本臣民が、国体に就いて何かを考へ、何かを説くことが必要だと考へるやうになつたのはその国体について何等か問題が生じたからであらう。国体そのものは古今を通じて易らないものであり、又易つてはならないものであるけれども、その国体について人々が何か考へを生じた時に、この国体についてやかましい議論が生ずるのであらう。（中略）それ故に国体論の起るといふことは国体そのものからいへば面白くない時代といはねばならぬものであらう」と、苦衷を込めて語つてゐる。「国体論」の盛行は「国体」の危機の表象であり、その危機に処して「伝統」に支えられた「國体」もまた再解釈された。この再解釈の結果の一つが「皇国史觀」と表現された歴史觀であろう。それは自由から明治的「國体論」とは異なるものであつた。

先述のような「伝統の下剋上」に際して、体制側は「皇国史觀」という史觀で対処し、それを「我が國に於ける今後の歴史叙述の基準」として他の史觀を抑圧しながら、史觀の画一化を進めていった。その際にはマルクス主義史觀が真っ先に弾圧された。なぜなら、マルクス主義史觀は「日本国民もまた革命的思想の伝統をもつて居る」と、日本に

は「革命」は存在しなかつた「国体の精華」を誇る「皇國史觀」に對して、明確に對立する「伝統」を打ち出してい

たからである。さらに「われわれの歴史叙述は一方に於いて当然著しく破壊的作業を行はねばならない。いまは寧ろあらゆる伝統尊重の衣裳に於いて見るのではなくして、却つて過去をその現実の全身に於いて捕ふべきである」と、「伝統」破壊の傾向^{〔12〕}を示していた。昭和一五年の大川『日本二千六百年史』の不敬書問題や昭和一八年に盛んになる

偽史排斥論^{〔13〕}も、同様な「皇國史觀」側の画一化の動きの現れである。從来ファシズム期の思想は、体制側を主体とした「国体イデオロギー」による彈圧史（そして、それに対する抵抗史）として叙述されてきた。しかし「皇國史觀」がそのまま「正史」となり得る訳ではない。むしろ「正史」とはなり得なかつた。つまり、Iのみを肥大化させた「皇國史觀」は次のような批判にさらされ、戦争遂行上不可欠な要請に対応できない弱みを有していた。

国民全体の科学精神といふものが向上されなければ、

一国の科学が隆盛になるものではない。（中略）かへり

みて、我が国民の科学精神はどうであらうか。一般国民はいふに及ばず、（智識階級、とりわけ各部門指導者層の間における甚だしき科学精神の貧困は實におどろくべき事実である。否むしろ非科学的精神の横行跋扈

こそは、わが国の現状であるといはねばならぬ。^{〔14〕}

戦争遂行上、科学・技術の軍事的動員という課題から、国民精神の科学水準の向上が求められた。このような批判が背景にあつてか、かえつて吉田三郎（国民精神文化研究所員）や平泉澄など、文部省に近い立場の学者から、「自慰的な日本史」や「国史の浅薄なる美化主義」を批判する意見が出てくる。^{〔15〕}これらは『国体の本義』Ⅱ「皇國史觀」が限界を露呈した証唆であろう。

以上、私は、「正史」の成立という事態を以て、日本における「思想としてのファシズム」の確立とみなしたい。そして結論を先取りすれば、ファシズム期に成立した「正史」として、I～IIIの要件全てに適う大川周明の歴史觀をこそ位置づけ、それを以て大川を日本ファシズム思想を代表する、最も正統的な思想家と位置づけたいのである。以下、大川の日本歴史觀について、平泉澄に代表される「皇國史觀」との比較にも留意しつつ、年次的にその特質を明らかにしていく。

二、大川の日本歴史觀の根本——〈日本のなるもの〉の貫通

まず大川が日本歴史を全体としてどのような立場から描こうとしたかを初の歴史書『日本文明史』の序から確認し

ておこう。

吾等は、大和民族本来の精神が、如何なる他の影響を蒙つても、決して亡びなかつた事を断言して憚らぬ。宛ら木の下蔭を流るゝ河が、常に己れを蔽ひ隠せる草木を生立たせて居る様に、此の精神の流れは、時には隠れ、時には現はれつつ、常に日本文明の生命となつて来た。此國の香高き文化の花は、皆な此流れに其の生命を託して居る。⁽¹⁴⁾

大川にとって「日本文明史」は、「大和民族本来の精神」⁽¹⁵⁾〈日本的なもの〉が切斷されることなく連綿と続いてきた歴史⁽¹⁶⁾。「日本精神」史であった。まずこれが第一の特質である。

大川は日本国家について、「わが大日本帝国は、日本国民の精神の創造であり、同時に此の精神を維持し發展する絶対の組織体」であると繰り返し説いていた。大川の歴史觀の第一の特質は、「日本国民の精神」の結晶として〈日本的なもの〉を維持發展していく「一個の偉大なる生命」であるという彼の國家觀に対応するものであつた。このような大川における〈日本的なもの〉が一貫不斷に流れるとする歴史觀は、「皇国史觀」の代表者たる平泉澄を「国史研究に於ける吾師」とさえ認識していった昭和四（一九二九）年以後では、より露骨となり肥大化していった。このような大川の歴史觀の第一の特質を支えたのが、連

綿たる天皇の存在である。「多くの國家に在りては、内外幾多の原因によつて、建国当初の國家的生命が、中断または断滅した」のに対し、「唯だ吾國に於ては、建国このかた今日に至るまで、國家の歴史的進化、一貫相続して中絶せざりしのみならず、國祖の直系連綿として國家に君臨し給ふ」とされた。天皇は、日本の「建国当初の國家的生命」を「中断または断滅」させることなく、言わば〈日本的なもの〉を切斷させることなく伝えてきた護持者であった。天皇は、まさしく連綿たる〈日本的なもの〉を体现、象徴する存在だったのである。

〈日本的なもの〉が不斷に貫いているという大川の歴史觀の第一の特質は、「皇国史觀」にも通じるものであるが、それとは決定的な違いがある。即ち、大川の日本歴史書は、吉野作造とともに明治文化研究にも携わった史学者尾佐竹猛が、次のように評しているように、決して「皇国史觀」のような「神がゝり的の非科学的歴史書」ではなかつた。

従来は左翼的の論法のものでなければ歴史と言はないやうな誤った時代があつた。近頃では神がゝり的の非科学的歴史書が氾濫してゐる。斯くの如きは現代日本人の知性の満足し得ないところであつた。然るに大川博士の『日本二千六百年史』は、この両方を征服し、その長所を探つて、博士独特の主張の下にたゆまざる

筆を以て書かれたものである。²⁰

事実、大川は「朝敵」とされた源頼朝、足利尊氏を好意的に評価している。²¹また「人若し北条氏の滅亡を以て、當時の国民の勤王心に帰せんとせば、そは甚だしき速断である。北条氏を倒せしものは、實に北条氏の政治に飽きたる諸国大小名の不平と野心とに外ならぬ」という記述に示されるように、尊皇心のみを基準に歴史を裁断するドゲマからは自由であった。このような把握は、平泉澄が倒幕、建武中興を「日本の日本たらんとする精神、即ち純正日本精神」の現れとし、また「回天の偉業は一に楠木正成の力によつて出来た」と、一個人の英雄の力によるものとする見方とは対照的である。²²大川の基本的立場は、むしろ非合理的な天皇主義や日本主義を極力排するものであった。

さらに、大川の歴史書にしばしばみられる表現に「夜飛ぶ蟲は光る螢のみでない」という言葉がある。大川は、中大兄皇子や源頼朝などの英雄を賛美する一方で、歴史が「光る螢」のような英雄のみで動くものではないこと、換言すれば「歴史に名を残さぬ多くの国民」の重要性を認識していたといえる。²³だからこそ大川は、「[日露]戦争の悲惨は平民のみ能くこれを知る。而も彼等は与へられるところ無かつた。又は与へられて十分でなかつた。然るに、正当に取得すべきものは、与へられずば之を奪はんとする。日本

の平民は、日露戦争以後漸く国家に於ける自己の地位、國家に対する自己の貢献を自覚して、自己の正当なる権利を要求し²⁴始めた」というように、民衆のエネルギーそのものの正当性は認めていた。大川は、この無秩序なエネルギーに対し後述のように「国民」という枠付けをし、方向づけようとしたのである。それに対し、平泉澄においては「かれら「百姓」は上御一人の恩恵で生を全うできる存在にすぎない」とされた。平泉にとって、民衆は天皇の仁慈を有り難く受けるだけの客体でしかなく、歴史の運行に主体的に参加できる存在ではなかつた。これらの点から、大川の歴史観と平泉の「皇国史觀」とは質的に異なるものであることが理解できよう。

先に、〈日本的なもの〉が一貫不斷であるという大川の日本歴史観の第一の特質が、〈日本的なもの〉の結晶として宣揚された彼の国家観に対応していることを確認した。このような日本国家観においては、当然個人は〈日本的なもの〉を共有する均質化されたものとして認識される。大川は現代における日本の歴史、「伝統」に無関心なマルクス主義を奉じる青年を念頭にして、「この『国史読本』は（中略）平凡なる一日本人のうちに潜める『日本』を、時間の秩序に従つて通俗的に解説せるものに過ぎない。若し此著が国民殊に青年の魂に、国史に対する関心を喚び起

し得るならば、予の欣懐無上とするところである⁽²⁷⁾と自著の意図を語つていた。ここで大川が自らをあくまで「平凡なる一日日本人」と規定している点は重要である。大川の提示する日本歴史は、「平凡」な日本国民にとって共同の過去の記憶²⁸・国民共有的「伝統」を創出する、「日本」という文化的同一性の語りとして機能するものであった。

そして、「日本的なもの」を共有することで均質化された人々は「国民」として枠付けられ、あくまでその秩序の内部においてのみ自発性の發揮が認められる。つまり、日本人は日本人として、其の独自の面目を發揮することが、即ち人間としての面目を發揮する所以である。されば真に国民となつてこそ初めて眞に人間ともなり得る（後略）。従つて吾等日本国に生れたるものは第一に先づ日本人であらねばならぬ⁽²⁹⁾という立場をとる大川にとつては、国民としての「独自の面目」、つまり国民的個性を發揮することがまず要求された。そのため、逆に国民的個性から逸脱した行為は最大の悪であつた。

其源を英米の個人主義・功利主義・快樂主義・物質主義に発せる民主主義的思潮——國本主義・健闘主義・理想主義・精神主義を生命として永遠に發展すべき日本精神とは、徹底して相容れざる民主思想が、今や滔々として吾国に流れ入り、（中略）盛んに国民に鼓吹せら

れつゝある。（中略）予は斯くの如き議論「民主主義的議論」、殆ど総ての人々が当然至極として怪まざる議論の裡に、許す可からざる非日本的精神を認め、之を根本より覆へさんが為に、与へらるゝ総ての機会に於て、之を攻撃し、之を克服せんとするものである。⁽³⁰⁾

大川のこうした「民主主義」批判には上述の如き背景があつたのである。さらに大正七（一九一八）年に起きた米騒動についても、大川は繰り返し激しく批判した。大川にとって米騒動は、「國本主義」から逸脱した利己的な「民主主義」に基づく行動であり、許し難いものであつた。大川は、このような「非日本的」な傾向に危機意識を感じ、この傾向を「日本国家は此の儘では不可と云ふ事を示す天意」として、つまり国家改造の必要性を痛感する契機として受けとつた。

大川の歴史觀の第一の特質は、「日本的なもの」が一貫するとされた点である。この特質は、連綿たる「日本的なもの」を切斷する、「民主主義」や「大正デモクラシー」といった「非日本的精神」の根絶の要請を必然化する。大川は、眞に「日本的なもの」を闡明するための日本の國家改造を志向することになる。それではこのようないかなる日本歴史觀²⁹・「伝統」を創造したのか。第二の特質について検討しよう。

三、大正～昭和初期——「革命」の連続の歴史

孰れの時代に於ても革新は已み難き必要に迫られて成就するものである。

而して吾国は新しき政治と、新しき道徳と、而して新らしき宗教とを得て、所謂封建時代七百年間に於ける国民生活の精神的基礎を与へられた。然るに徳川幕府の末に至りて、国民の生活は又もや革新の必要に迫られた。^㉙

此時「ペリー来航」に当りて志士の心中、復た忠を其君に尽すの念なく、其藩を愛するの念なく、心裏満腔唯だ日本其ものを憂へた。故に封建の精神は、此時に於て早く既に破滅し去り、其の形骸は十年ならずして斃れたのである。^㉚

このように、大川は、ある時代の固有の必要性にしたがつて構築される作為的な制度とそれを基礎づける精神は、その必要が去り、新しい要求が噴出してくるにつれてそれへの対応能力を欠き、漸次形骸化していく運命にあると見なしていた。そしてそのような把握は、「日本文明史は明かに四期を画することが出来る。即ち第一期は建国より大化革新まで、第二は大化革新より鎌倉幕府の創立まで、第三

は鎌倉幕府の創立より徳川幕府の大政奉還まで、第四は明治維新以後の現代である^㉛」というよう、大化革新、鎌倉幕府成立、明治維新といった、大川における「革命」を歴史区分のメルクマールとする歴史観に対応していた。ここで「革命」という語を用いたのは、大川においては、「政治的革新とは、現存せる国家の組織が、根本に於て尚ほ健全なることを容認し、法律乃至制度の変改によりて、其の枝葉を矯正整理せんとするものである。然るに革命とは、旧國家・旧社会の組織を根柢より否認し、一切の旧秩序を破壊して、全然別箇の主義に遵拠せる新国家を組織することである^㉜」というように、「革新」と「革命」は明確に区別されていたからである。

大川において日本歴史は、「此の「必要」と云ふ事が最後の決定者であります^㉝」という一文に端的にあらわれているように、自然な時の流れに基づく新たな「必要」への対応の歴史^㉞、「革命」の連続の歴史でもあった。これが大川の日本歴史観の第二の特質である。

そして、「政治・経済・道徳・宗教悉く腐敗し去りて、猶且國家が現状を維持し得る乎。明治維新は、仮令米國の來襲なく英露の東漸なくとも、日本精神が未だ亡び去らざる限り必ず起るべき革命であつた^㉘」というように、大川において「日本精神」^㉙、「日本的なるもの」は、まさしく「革

命」の根本、基盤であった。「日本精神」は、ある時代固有の精神ではなく、表面的、制度的变化のかけにおいても一貫してきたと觀念されていた。まさに大川の日本歴史観において、第一の特質と第二の特質は密接不可分な関係にあつた。

ところで、「伝統にしばられた時代」において「伝統」否定の傾向の強かつた左翼は、昭和六年の「満州事変」を契機として「伝統の下剋上」の事態に積極的に参加して行き、結果、ファシズム陣営への転向者を続出させた。このように様々な要素が流入し急激に膨脹したファシズム陣営においてはその統一は非常に困難であった。⁽³⁹⁾このような事情を考えれば、大川の歴史観における第一の特質と第二の特質の結合の意味は大きい。即ち前掲の尾佐竹猛の評の如く、大川の歴史観は「皇国史觀」とマルクス主義史觀の「両方を征服し、その長所を探つ」たものであつた。これは「観念右翼」から左翼からの転向者まで、ファシズム陣営を構成する人物の多様な思想を包含する歴史観であり得た。このことは、大川の歴史観が、分裂の危機を常に抱えていたファシズム陣営を統合する性格を有していたことを意味している。

以上、大川にとって日本歴史は、表面的には自然な時の流れに基づく新たな「必要」への対応の歴史＝「革命」の

連續の歴史であり、またそのような変化のかけでも、〈日本的なもの〉は切斷されることなく一貫している歴史であつたことを確認した。

先述のように大川は、連綿たる〈日本的なもの〉を切断する「非日本的精神」を根絶するために国家改造を目指した。その際、右のような日本歴史の延長上に、自らの國家改造を、「革命」たる明治維新を補完する「第二維新」として位置付けた。そして、「第二維新」を正当化する根拠は、連綿たる〈日本的なもの〉を体现する天皇と国民とを結び付ける「君民一体」という理念に求められた。大川は、昭和六年刊行の『国史読本』の結論において次のように説く。

天皇と国民との間にありて、その正しき関係を阻隔する者の存在を断じて許さざることが、實に皇室ありて以来、一貫して変ることなき大御心であり、不幸にして斯くの如き者の出現したる時は、ついに之を倒さずば止まぬことは、大化革新このかた、万古不動の国策である。(中略)まことに君民一体の日本に於て『君』は第一維新「明治維新」によつて、之「天皇」を武力の圧迫より救ひ参らせ、國家に於ける神聖にして尊厳なる地位を確立し參らせた。然るに今日の『民』は、黃金の圧迫によつて悲惨に呻吟しつゝある。(中略)それ

故に、黄金の不当なる圧迫より国民を解放することが、いまや君民一体の実を挙ぐべき無二無三の途となつた。⁽⁴⁰⁾

ここに至り、「君民一体」の理念が日本の「伝統」として新たに創造され、日本歴史は、「君民一体」の理念が繰り返し実現された歴史として再編された。しかし、前節で確認した鎌倉幕府打倒に関するリアルな記述は消失した訳ではなかつた。さらに大川のこの「君民一体」史觀は、『改版国史讀本』(日本青年社、昭和一〇)には見られないことから、「皇國史觀」に傾いたものというよりは、自らの「第一維新」を正当化するための一時的なものに過ぎなかつたと判断できる。しかし、「君民」間の介在者を排除した中大兄皇子や幕末の志士と同様に、「君民一体」の歴史に参画しその主人公になれると説く大川の国家改造論は、「伝統にしばられた時代」にあつては、左翼的革命以上に、現状打破を切に望む当時の国民を惹き付けるものであつた。

このような議論の背景には、昭和四年頃から本格的に登場する、大衆的組織運動を目指すファシズム運動があるといえよう。

さらに、大川が日本歴史に込めた国家改造の情熱は、読者にきちんと伝わっていた。だからこそ、大川の『日本二千六百年史』は五〇万部も売れたのである。⁽⁴¹⁾ そのことは、批判的な立場からの書評さえもが、次のように『日本二千六百年史』の結論は、「東亜新

六百年史』における「国家革新」の情熱と影響の大きさを正確に読み取つてゐることに窺える。

此の書『日本二千六百年史』は言ふ迄もなく、日本の歴史を説いて時務を語つてゐる、而して国家革新の原理を説き、国内革新の大勢を作らんことを熱望する著者の真意が紙面に躍動してゐることは、何人にも容易に之を解することが出来る。

皇國二千六百年の歴史を通じて、革新日本の指導原理を説いた一個の教書として、各方面に愛読されてゐる様である。従つて、その影響感化の及ぼすところ、蓋し甚大なるものを私は確信してゐる。⁽⁴²⁾

四、昭和一〇年以後——不斷に外来思想に「方向を与へる」歴史

昭和一〇(一九三五)年刊行の『改版国史讀本』の記述を最後に、以後、大川の日本歴史書からは、「第二維新」の記述は消滅する。先述のように、昭和一四年刊行の『日本二千六百年史』は「國家革新」の情熱にあふれ、反響を呼んだことは事実だが、結論部においては国家改造について全く触れない。ファシズム国家化が着々と進む中で、当時の大川にとつて最大の問題とは認識されなくなつたためであろう。そして『日本二千六百年史』の結論は、「東亜新

秩序の確立は、やがて全亞細亞復興の魁である。全亞細亞復興は、取りも直さず世界維新の実現である⁽⁴³⁾と説く。國內改造の「第一維新」論に代わって、「世界維新」としての「全亞細亞復興」こそが最大の問題とされていたのである。さらに太平洋戦争の開戦は、それまで国民統合を主目的としていた「日本精神」論に新たな課題を突き付けた。アジアから自発的な戦争協力を引き出す必要性が高まるにつれ、〈日本のなるもの〉のみならず、〈アジアのなるもの〉との関係も問われることになったのである。

先述のように、大川の日本歴史書は非合理的な天皇主義や日本主義を極力排するものであった。大川は、戦時下においても、次のように当時の独善的な〈日本のなるもの〉の強調を批判し続けていた。

亞細亞の諸民族をして正しく日本を理解せしめ、積極的に日本に協力せしめるためには、日本民族は亞細亞的に自覺し、亞細亞的に行動せねばならぬ。然るに今日の日本人の言行は善き意味に於ても、悪き意味に於ても、余りに日本的である。(中略) 徒らに『日本的』なるものを力説して居るだけでは、その議論が如何に壮烈で神々しくあらうとも、亞細亞の心琴に触れ難く、従つて大東亜戦争のための対外思想戦としては無力である。⁽⁴⁴⁾

文部省は、「皇国史觀」とセツトに、「今日の世界的転換期に当り」「真に現実を指導するに足る最高不動の世界觀」として「日本世界觀」という「八紘一宇」的秩序を提唱していた⁽⁴⁵⁾。しかし、それは到底「現実を指導するに足る」ものではなく、「大東亜戦争のための対外思想戦としては無力」なものであった。このような現状に対し、大川は真に「対外思想戦として」有効な「日本精神」論の必要性を意識していた。

それでは、大川の日本歴史Ⅱ「日本精神」史は、どのようにこのような時代的要請に応えたのだろうか。大川が「日本精神」と「亞細亞精神」との関係を勘案し、「対外思想戦として」有効な日本歴史觀として提示していたのが、不斷に外来思想に「方向を与へる」ことを続けてきた歴史というものであった。これが第三の特質である。大川は、岡倉天心『東洋の理想』に全面的に依拠して書いた「日本文明の意義及び価値」論文(大正二年九月)以来、一貫して「日本精神」の「旧を失ふこと無くして新を抱擁する驚嘆すべき精神」を贊美してきた。その意味で、この第三の特質自体は初期の段階からあつたものであるが、改めて時期的要請に基づいてクローズアップされたのである。

日本精神の数ある特徴のうち、その最も著しきものは、入り来る総べての思想・文明に「方向を与へる」こと

である。それ故に吾等は日本精神を偉大なりとする。

(中略) 吾等は先づ支那思想及び文明と接觸して之を吾有とし、次いで印度思想及び文明と接觸して之を吾有とした。亞細亞精神の両極ともいふべき此等の思想並に文明は、實に日本精神によりて正しき方向を与へられたるが故に、今日まで其の生命を護持し長養されて来た。支那思想の精華、従つて支那文明の根柢は、孔孟の教でないか。而して其の教が日本に活きて支那に死んだのだ。(中略) 仏教は遂に印度を興し、又は救ひ得ざりしのみならず、印度も仏教を生かし得なかつた。今や仏教は、僅かに錫蘭島に於て小乘的信仰者の少数を有する以外、殆ど印度に其跡を絶つてしまつた。⁴⁶

大川は、「日本精神」の最大の特徴として外来思想に「方
向を与へる」ことを擧げる。そして、中国やインドでは滅
びてしまった儒教、仏教が日本には「今日まで其の生命を
護持し長養されて來た」とする。この不斷に外来思想に「方
向を与へる」ことを続けてきたという第三の特質は、いう
までもなく「日本的なもの」が一貫するとされた第一の
特質と一体のものである。

そして、このような大川の「日本精神」史は、彼の主觀からすれば「決して他国文明を蔑視し、自ら固陋に甘んずるが如きものでない」とされた。だからこそ大川は、「亞

細亞諸國は、日本歴史について真個に学ぶところなければならぬ」と説くことができたのである。大川は、このよう
にアジア諸国に受け入れられる「大東亜戦争のための対外
思想戦として」有効な「日本精神」史を打ち立てていたの
である。

従来大塚健洋氏は、この不斷に外来思想に「方向を与へ
る」ことを続けてきたという第三の特質を強調して、大川
の「日本精神」論の「開明性」を主張してきた。⁴⁹ しかしこ
の第三の特質は、一見開かれた性格に見えながら、結果と
してはアジアの諸文明は日本に帰一せしめられねばなら
いという閉鎖的な思想に帰結せざるを得ない。⁵⁰ そしてこの
特質は、現実には次のように「大東亜戦争」や日本の指導
性を合理化する根拠として機能した。

亞細亞復興は単に歐羅巴よりの政治的独立を意味する
ものでない。そは同時に亞細亞諸民族の精神生活に古
代の光榮を復活せしめることである。而して日本は實
に此の莊嚴なる使命のために戰つて居る。何となれば
東洋の善きもの、貴きものが、よし其の故国に於ては
單に過去の偉大なる影となりはてて居るとしても、日
本に於ては現に澆刺たる生命を以て躍動して居るから
である。⁵¹

大川にとつて「大東亜戦争」は、アジア文明の精髄を現に

保持し、護持していく日本による「亞細亞復興」——政治的にも精神的にも——実現のための戦いであった。そこでは、当然ながら、「大東亜圏内に於て、日本が指導的地位に立つことは、東亜新秩序の確立と發展とのために、最も自然にして且つ必要なることと言はねばならぬ」というよう、アジア文明の護持者日本の指導性が自明視されていた。

昭和一五（一九四〇）年七月の第二次近衛内閣成立を画期とし、昭和一六年の東条内閣誕生、対英米開戦を通じて、日本のファシズム国家化は完成する。そして同時に、ファシズム運動はその目標を喪失し役割を終えていく。大川はファシズム国家が遂行する現前の戦争を合理化し、「善導」するよう活動するほかなかつたのである。

おわりに

本稿では、従来トータルに検討されてこなかつた「思想としてのファシズム」を「伝統」という観角からとらえ直し、大川の提示した「伝統」を以て、「正史」の成立¹¹、「思想としてのファシズム」の確立とみなした。当然ながら、

大川を代表的なファシストと把握する研究は、これまでむしろありふれたものであつた。しかし、それらファシスト

とする把握は、多分に大川の思想の否定的な面を拡大して示すことを結果していた。本稿の如く国民国家論と密接に関わる「伝統」という見地からファシズム概念を再考することで、より客観的に大川を歴史上に位置付けることが可能になつた。以下、本稿を要約しよう。

大川の日本歴史觀の特質は三点指摘できる。それは、第一に「日本的なもの」が一貫する歴史であり、第二に「革命」の連續の歴史であり、第三に不斷に外来思想に「方向を与へる」ことを続けてきた歴史であつた。そのうち、第二の特質は、国内的に、自らの「第二維新」（＝「擬似革命」）を正当化し、第三の特質は、対外的に、日本を盟主とするアジア解放戦争（＝「大東亜戦争」）を合理化するものとして機能した。大川の日本歴史觀は、「日本的なもの」が一貫するという特質を基盤に、現実政治での国家改造、アジア解放という内外の課題に対応する特質を兼ね備えていた。そしてこのファシズム期の「正史」は、「観念右翼」、左翼からの転向者、アジア主義者など多様な人物を内包し、分裂の危機を恒常的に抱えていたファシズム陣営を統合する歴史觀であつた。

また、従来ファシズム期の日本を支配した歴史觀は、「皇國史觀」だと説明されてきた。しかし、ファシズム期の「正史」は、平泉澄に代表される「神がり的の非科学的歴史」

書」では決してなかつた。「正史」を提示した大川は、むしろそのような非合理的、独善的な「日本精神」論がいかに無力かをよく知つていた。大川は、「現代日本人の知性の満足し得る、日本国民共同の過去の記憶＝国民共有の「伝統」を創造し、「国民全般の好読物たるべき日本史」を提示したのである。英雄主義に終始した「皇国史觀」に対し、大川の創造した栄えある「伝統」は、まさに下から「光る螢」ではない、「平凡」な国民一人一人が参画できるものであつた。下からの歴史的世界への参加の欲求をすくい上げた大川の「伝統」は、実際に当時の国民に熱狂的に歓迎され、国民を積極的に戦時動員に駆り立てる役割を果たした。「正史」を提示した大川は、日本ファシズム思想を代表する、最も正統的な思想家といえるのである。

註

- (1) 「大川周明君より」『大陸』三二号、大正一・九、六七頁。
- (2) 松本健一『大川周明 百年の日本とアジア』、作品社、一九八六、清家基良『大川周明と日本精神——平泉博士と比較して』『芸林』三七卷四号、一九八八・一二、子安宣邦『歴史表象の要求——『二千五百年史』と『二千六百年史』との間』『江戸の思想』八、ペリカン社、一九九八、大森美紀彦『革命思想家から統制思想家へ——大川周明における革命思想の転換』『政治文化』一四号、一九九九など。
- (3) 『日本の言行』第一、行地社出版部、昭和五、三三一三頁。
- (4) 偷父「静的文明與動的文明」『東方雑誌』一三卷一〇号、一九一六・一〇。
- (5) 長谷川如是閑「万葉集に於ける自然主義——革命期における政治形態との関係」『改造』昭和八年一月号、『現代日本文学全集第九四卷 現代文芸評論集(一)』、筑摩書房、一九五八・二九五頁。
- (6) 喜田貞吉「民族と歴史」発刊趣意書『民族と歴史』一卷一号、大正八・一、参照。引用は四頁。
- (7) 尾藤正英「皇国史觀の成立」、相良亨他編『講座日本思想四時間』、東京大学出版会、一九八四。田中卓『皇国史觀について』『皇国史觀の対決』、皇學館大学出版部、一九八四。
- (8) 山田孝雄『肇國の精神』、教学局、昭和一四、三・四頁。
- (9) 小沼洋夫「皇国史觀の確立と『国史概説』」『文部時報』七八九号、昭和一八・五・一〇、一五頁。
- (10) 羽仁五郎『佐藤信淵に関する基礎的研究』、岩波書店、昭和四、一頁、七六頁。
- (11) 座談会「偽史を攘ふ——太古文献論争」「公論」昭和一八年九月号、植木直一郎「思想謀略と神代文字」「文芸春秋」昭和一八年一・二月号など。
- (12) 企画院研究会『国防国家の綱領』、新紀元社、昭和一六、

一九一頁。

(13) 吉田三郎『思想戰——近代外國關係史研究』、歛傍書房、昭和一七、八七頁。平泉澄『國史の威力』『日本諸學』三号、昭和一八・五、九五頁。

(14) 『日本文明史』序、大鎧閣、大正一〇、一〇頁。

(15) 大川のこのような日本歴史觀の把握は、その表現も含めて岡倉天心の日本美術史觀の影響である。岡倉天心『東洋の理想』(『岡倉天心全集』第一卷、平凡社、一九八〇)、二〇頁参照。

(16) 以上「大日本帝國の使命(一)」「養真」八一号、大正七・三、一七八頁、一六頁。

(17) 「何故に國史を学ぶか」『月刊日本』五四号、昭和四・九、五頁。

(18) ○『國史讀本』第一章、先進社、昭和六、一九・二〇頁、二〇頁。以下『日本文明史』『國史讀本』『日本二千六百年史』三著に共通している資料については「○」で、『國史讀本』『日本二千六百年史』二著に共通している資料については「○」で示す。

(19) 「『國体の本義』編纂參考書」四、國史・思想史・文化

史・教育史の項目中には大川の『日本文明史』が挙げられている(「志田延義氏所藏『國体の本義』起草關係史料及精研・教學局資料」、国立教育研究所附屬教育図書館所蔵マイクロフィルム、R一一一〇)。

(20) 尾佐竹猛「著者獨特の主張」、小冊子『大川周明著『日本二千六百年史』感想集』、一〇頁。

(21) ○『日本文明史』第一〇章、一二四・六頁、第一三章、

一五七・九頁。大川のこのような評価は、山路愛山に依拠している。山路愛山『源賴朝』、玄黃社、明治四二、六三

四・九頁、同『足利尊氏』(明治四二)、岩波文庫、一九四九、二二一・二頁及び、同『武家時代史論』、有隣閣、明治四三、二七・九頁参照。

(22) ○『日本文明史』第二二章、一五一・三頁。

(23) 平泉澄『建武中興の本義』、至文堂、昭和九、八頁、一七五頁。

(24) ○『日本文明史』第一六章、一八八頁。

(25) ○『國史讀本』第二五章、一七五頁。

(26) 北山茂夫「東京から横浜へのある断章——学究・教師としての歳月」『奈良朝の政治と民衆』、校倉書房、一九八二、二六五頁。

(27) 『國史讀本』はしがき、一頁。

(28) 「大日本帝國の使命(三)」「養真」八二号、大正七・四、一頁。

(29) 「大日本帝國の使命(一)」「真人」八〇号、大正七・二、一〇頁。

(30) ○『國史讀本』第二五章、二七八頁。

(31) 「尋問調書(大川周明)」(昭和八・四・一七)、『現代史資料5 国家主義運動(一)』、みすず書房、一九六三、六八五頁。

(32) 以上「平安朝より鎌倉時代へ」「道」九〇号、大正四・一〇、三七頁、五一頁。

(33) ○『日本文明史』第二五章、三四〇頁。

(34) ○『日本文明史』第三章、三二頁、『日本二千六百年史』

第五章、第一書房、昭和一四、六九頁。

『日本二千六百年史』第三〇章、四四四頁。

(35) 「大化革新を憶ふ」『道』一八七号、大正一三・一、二九頁、◎『日本文明史』第一三章、一五六頁、註(38)資料參照。

『亞細亞的言行』『新亞細亞』昭和一八年九月号、一頁。

(36) 『日本文明史』第二五章、三三六頁。このような大川における「革新」と「革命」との区別は北一輝の影響である。北一輝『支那革命外史』(大正一〇)、『北一輝著作集』第二卷、みすず書房、一九五九、一二〇頁参照。なお大川は、昭和六年にコミットした三月・一〇月両事件を「革命」ではないと主張していた(『大川周明博士控訴公判記録』

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(37) 『尋問調書(大川周明)』、前掲書、六九八頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(38) ○『日本文明史』第二四章、三三五頁。なお資料中の「革命」の語句は、『改訂新版日本文明史』(行地社出版部、大正一五)においても「革命」のままだが、『国史読本』以後は「革新」に変更されている。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(39) ファシズム運動、ファシズム国家については須崎慎一『日本ファシズムとその時代 天皇制・軍部・戦争・民衆』、大月書店、一九九八、参照。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(40) 『国史読本』第二五章、一八〇~一頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(41) 春山行夫「私の『セルパン』時代」、林達夫他編著『第一書房長谷川巳之吉』、日本エディタースクール出版部、一九八四、一二六頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(42) 以上、大野慎『大川周明氏の二千六百年史を駁す』、日本協会出版部、昭和一五、一〇頁、六頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(43) 『日本二千六百年史』第三〇章、四四四頁。

『文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」』『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

(44) ○『日本二千六百年史』第二章、二五~八頁。

『文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」』『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

(45) 文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

『文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」』『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

(46) ○『日本二千六百年史』第二章、二五~八頁。

『文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」』『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

(47) ○『日本二千六百年史』第二五章、三三一頁。

『文部省「日本世界觀と世界新秩序の建設」』『週報』二九二号、昭和一七・五・一三、四頁。

(48) 『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(49) 大塚健洋『大川周明 ある復古革新主義者の思想』、中公新書、一九九五。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(50) 大川のアジア観については、拙稿「昭和期における大川周明のアジア観」、文学・思想懇話会編『近代の夢と知性』文学・思想の昭和十数年前後(一九二五~一九四五)、翰林書房、一〇〇〇、参照。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(51) 『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。

(52) 「指導能力と指導権」『新亞細亞』昭和一八年一〇月号、一頁。

『大東亞秩序建設』、第一書房、昭和一八、二一〇頁。